



TITLE:

南米ブラジルよりの快信

AUTHOR(S):

神屋, 信一

---

CITATION:

神屋, 信一. 南米ブラジルよりの快信. 天界 1933, 13(143): 116-120

ISSUE DATE:

1933-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162321>

RIGHT:

## 南米ブラジルよりの快信

昭和七年十月三十日

サンパウロ州ノロエステ線ルツサンビラ驛第一アリアンサ  
栗原自然科学研究所 神 屋 信 一

京 都 帝 國 大 學

山本一清先生 御待史

謹啓、八月八日附の先生からの御親切なる御手紙、十月十二日正に拜受仕りました。實は、會から入會御許しの御通知があるかと、そればかりを毎日の様に皆で待つて居りました。ところが、七月の末から革命騒ぎが起りまして、日本からの郵便物は悉くリオデジャネイロに抑留せられますし、サントス港は聯合軍の海軍のため封鎖されるといふ状態で、國の内外を問はず、通信は全く出来ないことになつて終ひました。それで、私達は、會からのお便りがリオ市で留められて居るのではないかと、どれ位革命のすむのを待つたかしれませんでした。ところが、そのだらしない革命騒ぎも、革命軍であるサンパウロ州の敗北といふことになり、十月二日復舊いたしたのであります。先生からの御手紙は、その最初のサントス入港の日本船で到着いたしました。先生から、あの様なお手紙を頂戴いたしまして、皆々どんなに喜んだことで御座います。それに、お寫真まで頂戴いたし、お手紙とお寫真とを拜見する爲めに、封筒はその日に破れて終ひ、ノリ附けをいたしました。もうそれも破れかけた位、毎日幾回となく拜見いたします。お寫真は、一葉、その日に手製で額縁を作つて皆の勉強室にかけさして戴きました。さうして大窪、勝浦の兩君は、その前で、眞面目に黄道光観測の整理をいたして居ります。御送り下さいました御著書は、その翌日大雨の中を學校のかへりに頁子ももつて歸つて参りました。革命がすみ次第購入しなければならないといつて、その準備をして居た御本でありますから、飛び立つて喜び合ひました。それにしても私等無學な者達にあの様な御期待をして戴きまして、どうすれば私達は御心に添ふことが出来るかと、あまりの責任の重大さに心痛致して居る次第で御座います。しかし、日本と違ひまして、貧しくはありますが、自分達の廣い土地に住んで居るのでありますから、不自由を忍べば何人の不安もないわけであります。皆で心一つにして、この仕事は私達の代ばかりでなく、永久に續けて行きますことを堅くお約束申上げ、我が名譽ある同好會の名を汚す様なことなく、永遠に忠實な南天の見張り人として、學界のため、僅かなりともお役に立つことをお誓ひいたします。

さて愈々入會さして戴きました上は、一應私達の仲間に就いて、その内容を申上げておかなければならないと存じます。私は明治廿六年生れの中老でありまして、大窪文秀君が卅九年生れ、勝浦茂雄君が四十一年で、兩君とも獨身者であります。頁子は私の長女で大正十年生れの赤坊であります。此の土地に入植したのは大正十五年七月でありまして、自分の子供の爲めにも、青年の人達にも自由に使用の出来る研究

室を作りたいと念じて居りましたが、何分にも開拓が忙しい爲め、心ならずも六年間を経過いたし、自分自身も老境に入らうとしますし、子供も成長いたしますし、それに、非常な理想を以て建設せられたこの移住地は、何時の間にか全く打算にのみ走つて、最初の理想は全く地に落ちたかの感がありまして、このまゝでは將來、到底、建設者永田圃氏の理想郷は、永久に實現し得ないであらうとさへ思はれる様になりました。しかも、世界をあげての不況は、この交通不便な避地では一層の打撃を受ける状態となり、いやが上にも、打算から打算へと落ちて行くのでありまして、中堅となるべき青年には正氣なく、向上の精神に燃ゆるなどといふものは勿論あり様のない有様となつて終つたのであります。この時、萬難を排して、最初の計劃の一つを勇敢に實現したのはアリアンサ基督教會々堂建設でありました。私は、此の際、研究所もどうしてでも建設しなければ、何時まで経つてもよい時機が到來する筈がないと思ひましたので、決心をいたして、先づ同志を求めたのであります。その同志が大窪、勝浦の兩君であります。種々と相談をいたしました、なにしろ勉強する材料は無盡藏であります。それで天體の觀測、氣象の觀測、動植物、それに、村として農産製造等の研究も必要だといふので、手あたり次第に研究をするといふことにしました。藤原博士の御著書の名の様に、全く「雲を掴む」様な計劃であります。どうもこれでは研究所の名前のつけようがないといふので、すこし厚顔しいけれども大げさに「自然科學研究所」といふ看板を出すことにしたのであります。もつとハツキリ申上げますと栗原といふ姓を頭につけて呼んで居るのであります。後にお話を申上げなければなりませんから、何故栗原といふことにしたかを申上げます。私はブラジルに移住いたすまでは南支那に放浪いたして居りまして、當時その地の總領事でありました現外務省大臣官房文書課長の栗原正氏の知遇を受け、僅か二年足らずではありましたが、心から愉快に日本の爲めにも支那の爲めにも働くことが出来、しかし栗原氏御自身は『君の心からなる御援助によつて愉快に仕事をする事が出来たことは生涯忘れることが出来ない』といつて下さつて居るのであります。それで、私はこの仕事を始めるに當りまして、栗原氏を忘れない爲めと、私の足りなかつたところを幾分かでも補ひたい心もちから、栗原自然科學研究所といふことにしました。兩君もよるこんでこの名に賛成して下さいましたので、今日に至つて居るのであります。私達が、仕事として第一にはじめたのは、手近な蝶の採集でありました。僅かの期間に三百種も集め、百種位は苦心して東大の理科動物學教室宛にお送りいたしました、何人のお返事もないので只今ではやめて居ります。その頃一個の石を拾つて居りました。この附近は全く石のないところでありますし、その石の一角が人工的に欠けて居りますので、石器があるかも知れないといふ考へをもつて居ましたので、次に遺跡の搜索をはじめることになりました。幸運にも先住民族の遺跡の發見を次から次へとこの地方一帯にすることが出来まして、大窪、勝浦兩君の努力は今日數百の石器と數千の土器を得ました。そのお蔭で、この原始林地帯に全く想像もしてゐなかつた先住民族の研究の端緒を得る

に至りまして、一般に注目されるようになりました。これは研究所としての全くの掘出しものでありまして、學界に充分貢獻することが出来るといふ自信をもつて居りまして、只今整理中であります。扱て、一方、天體と氣象の方は、其の間に私が望遠鏡と機械類を間に合はすことになつて居りましたのですが、何分にも不況であるのと、永年の開拓事業の爲め、貧乏をいたして居りまして、仲々思ふように参りませず、八方購入方を依頼し、なほ萬一の場合をあてに、拓務省宛に日本力行會長永田穉氏を介して補助金の申請をいたして置きました。購入の方は、永田氏が當地へ來られた時に、もし拓務省が補助をして呉れなかつたら、外務省の栗原氏に、少くとも15匁位の反射望遠鏡を購入して送つて貰つていただき度く、尤も栗原氏は貧乏であるから買へないかもしれないから、そのときは小口徑のものを會長に御購入をおねがひするといふ具合で、第一線、二線、三線と戦陣を張つておいたのでありますが、一年を過ぎても何んの便りもないので、ガツカリしてゐたのでありました。私は兩君にもすみませんし、全く弱りきつて居りました。その間に、兎も角、黃道光の觀測を進めて行くことにしたのでありました。ところが、突然與謝野氏の御訪問をうけ、會員にならないかとお話でありました。私の方も、準備出來次第入會さしていただくつもりであると御返事をしたのでありますが、觀測所も出來て居るのだから入會する様にとのお話でありましたので、過日御願ひすることにいたしましたのでありました。なほ與謝野氏より五藤氏製作の2.5センチ五十倍の小口徑を拜借することになり、兎も角、黒點の觀測を間に合せて居ります。そのうち、黃道光の觀測も兩君で二百回以上のスケッチが出來あがりましたので、革命がすんだら入會のお許しがなくとも、お送りして御指揮を仰ふではないかと相談いたし、革命終了を待ちにまつて居りました。さうして待つた革命の終つた直後、あの先生からの私達が終生忘れることの出來ない御親切なお手紙を頂戴したのでありました。さうして、その夜は將來のことなど皆でおそくまで話合ひ、明日はきつと御本を戴けるだらうと、子供がお土産を待つ様なうれしさで、寢につきました。翌日、長子が學校のかへりに先生からの御本をもつてかへりました。それと一緒に、日本力行會長永田氏からのお手紙が、思ひがけなくも、來て居りまして、たぶん望遠鏡の斷り狀であらうといふ氣持で開いて見ましたところが、これまた意外の快報でありました。それによりますと、外務省の栗原氏のお心添えにて、拓務省が補助をすることになるらしいが、八年度の豫算に計上といふことになつて居るから、領事館へ照會するかもしれないから、神屋君が實行して組合の方で監督をするといふ返事をして呉ればよいといふ意味のお手紙でした。(私が實行してと特にあるのは栗原氏が私に對して責任をもたれたことと思ひます、又、請願は所長である大窪君の名でしたのですが、觀測者として私の名を記し、肩書に、元臺灣總督府糖業試驗場氣象觀測所擔任糖業講習所氣象學講師と、僅か一年あまり位擔當した仕事を長々と書き添へたことからだと思ひます。)このお手紙によりますと、どうやら補助もして貰へさうであります。出願の際、私は20匁反射望遠鏡一臺と、他は氣象觀測用機械を、

何れも現品で下附されるか、貸與されたいといつてやつたので、金額は遠慮いたし、千四五百圓位だったと記憶して居ります。どんな方法で下附して下さるものか、何に分にもお役所のことですから、よくはわかりませんが購入にあたつては相談があるとは思つて居ります。しかし、この遠方で相談ばかりで書面の往復をして居たのでは仲々來年の間にも合はないかもしれないと存じます。それで、こんなことを申上げては誠に失禮ではありますが、御言葉にあまへて申上げることいたします。もし先生に御差支御座いませんでしたら、外務省の栗原氏が力行會の永田氏かに御打合せ下さいまして、この件について望遠鏡その他一切を先生が御選擇下さるようには御配慮御願ひ出来ませんでせうか。又、もし出来ますことなら、望遠鏡だけでも先きに御心配して戴けまんでせうか。兩氏へ何卒お打合せ下さいます様、御願ひ申上げます。輸入も學術用として官廳の手によりませんと、ブラジルの役人は全くわけがわかりませんので、高率の輸入税をとられることと存じます。幸ひ外務省に栗原氏がおりますし、輸入港であるサントスの領事館出張所主任の南條副領事は同好會員と存じます。又サンパウロ總領事内山氏は栗原氏の親友でありますから、好都合にまゐりはせぬかと存じております。勝手なことばかり申上げて誠に申譯御座いませんが、萬事宜數御願ひ申上げます。次に、前にも申上げました通り、この研究所の所長は大窪君に御願ひいたしてあります。別項にも申上げました通り、至極眞面目な人で、數學に特に優れた頭腦をもつて居りまして、責任をもつて事をなす人であります。勝浦君も稀れに見る熱心な勉強家でありまして、大窪君の相棒としまして實に適當な人であり、鋭眼である點、觀測家として將來ある人と信じて居ります。良子はあまり子供でありますので、私が代つて會員にはして戴くことにいたしますが、良子も熱心に勉強いたして居ります。自分はブラジルの學校を卒業したら日本へかへつて、女だから山本先生のおばさんに教へて戴いて、ブラジルへ歸つて南米一の女天文家になるのだと意張つて居ります。愚妻も所員であります。仕事が忙しく、たまに石器を拾つてかへる位のものであります。私は皆の踏臺になることが出来れば結構だと存じて、努力いたして居りますが、それも仲々不確かなものに終りさうで、心配いたして居ります。扱て、取りとめもなく長々と種々の事を書きつづけて參りましたが、この模様ではいつ筆を擱くことになるやら見當もつきませんので、御迷惑と存じますから、これ位でお別れ申上げることいたします。なほ特別にお尋ね申上げ度いことが兩君からも御座ましたし、支部のことにつきましても申上げ度いことがありますので、次へ遠慮なく書かせて戴きます。皆と話合ひながら書きますので、順序もなく列べますからお許し下さい。

一、天文家は私達素人觀測家にどんな要求をして居られるのでありますか？

二、南天の見張番として特に注意しなければならないことは何でありますか？

三、當地に於て天文年鑑を見ますのにどの様な修正をしなければなりませんか？

○支部のことにつきまして

一、先生からのお手紙を與謝野氏にお目にかけましたら、與謝野氏は先生と特別に

親しい御関係がおりであるといふので、種々と各方面に御世話下さつて居り、感謝いたして居ります。昨日、お招きによりまして、當地アリアンサ・ホテルでお目にかかりました。御要件は支部設置に關してでありまして、非常に細い點にまで御相談がありまして、一々御尤で御座いました。そのうち取りめました一二の件に就いて申上げておきます。

1. 支部は栗原研究所におくこと。
2. 支部幹事といつた様な責任者は當分私がすることに致しました。不適任であることは勿論で御座いますが御許を得たいと存じます。

上の様なことでありまして、その他の件は申上げる程のことも御座いませんでした。只だ私達として持にお願ひ申上げておきたく存じますことは、觀測とか研究とかのため以外に、單に事務的な事柄のために、あまりに煩雜な世事に苦しまなければなりません際は、私達研究所だけの支部を御許し下され度いのであります。私達は望遠鏡がなくとも、經費に苦しもうとも、後援して下さる方がなくとも、忠實な觀測者であることには永遠に變らない決心をもつて居ります。研究所だけの支部としていただけなくとも、それはいたし方も御座いませんが、仕事は眞面目にいたしますから御安心下さいませ。しかし只今のところその様な心配は起らないことと存じますが。

○入會者について(略す)

## 倉敷天文臺創立六周年記念式報告

水 野 千 里

昭和七年十一月二十七日、創立六週年記念式を舉行した。この日、山本博士が御臨席の上、獅子座流星群觀測の第一報をお話し下さることになつて居たが、前月の夕刻「ヤマイユケヌ」といふ電報を頂いた。

當日午後二時、水野主事開會の辭に次いで、過去一ヶ年の事業を報告し、原名譽臺長の式辭、前縣會議員古屋野橋衛氏祝辭を述べられ、講演に移り、荒木健兒氏は、ジョン・ハーシエルの小傳、水野千里氏は彗星と流星との關係に就いて述べた。別室には天文に關する新刊書、繪葉書を陳列して縦覽に供し、夜は天體の觀望を行つた。